

大学生に知ってほしい性感染症の常識

§ はじめに

性感染症とは、性的接触により伝播してひろがる感染症をいいます。古くは性病と言われ、特殊な世界、花柳界の病気と思われていた。その証拠に、1891年に性病科の講座が東京大学で初めて開設されたが、皮膚科花柳病科と標榜された。当時から人々は、梅毒や淋病等の性病に悩まされていた。何故いま、性感染症がクローズアップされているのか？性行動の低年齢化に伴い、若年者の性感染症の罹患、本人も知らない間に感染し、パートナーに感染させている不顕性感染の問題、1981年初めて報告されたエイズ／HIV感染が今や全世界で4、000万人の患者数まで増大したことが社会背景にある。今こそ性感染症について情報を開示し、予防対策を実行していくことが急務であり、特に次世代を担う若人にとっては重要である。

§ 若者の性行動と性行動パターンの変化

1990年代半ばから、クラミジア感染症や、淋菌感染症、10代女性の人工妊娠中絶率が急上昇を始め、我が国の若者における無防備な性行動の拡大が示唆される。東京都性教育協会の性行動調査（1984－2005年）によると高校生の性交経験率が急上昇している。1984年に男子22.0% 女子12.2%であった高校3年生の経験率は、1990年代半ばには男女逆転し、2005年には、それぞれ37%、46%となっている。

栃木県でも2001年の調査で東京都と同様の結果を示し、高校生、大学生を含めた若者の性行動においては都市と地方の格差はない。興味深いデータを紹介すると、1999年に京都大学、木原教授の全国国立大学学生の性交経験者の調査結果で、大学1年生男子24%女子22%であったが、4年生では、64%74%と上昇し、女子が逆転している。

性行動の若年化と多数の相手と多様な性行動を行う傾向が進み、オーラルセックスも普通の性行為の一つになっている。結果的に男女間の性器から咽頭へと感染する。性感染症に罹患している人ほどHIVに感染しやすい。

再度強調するが、日本の若者の性行動について、性行動の早期化と、女性の活発化によって、性的ネットワークは若年者と女性層に拡大、男性は性産業とそれを利用する層の性的ネットワークと連結し、女性では“社会人”とのネットワークと連結している。

§ 感染症新法と性感染症の疫学

従来の①伝染病予防法②性病予防法③AIDS予防法が廃止されて、1998年に“感染症新法”が公布された。その中で特定感染症予防指針が示され、性感染症については①性器クラミジア感染症 ②性器ヘルペス ③尖圭コンジローマ ④梅毒 ⑤淋菌感染症を代表疾患としている。

① クラミジア感染症

ベトナム戦争以後、帰還兵から米国の若者を中心に感染拡大しヨーロッパの若者へ、そして日本の若

者の代表的な性感染症になった。

男性の尿道炎、女性の子宮頸官炎、進行すると骨盤内炎症性疾患を起こし、子宮外妊娠や不妊症の原因となる。女性においては、男性の1.5～2倍強の罹患率である。

② 淋菌感染症

男性ではクラミジアと淋菌感染症は、性感染症の中で各4割の発生を起こすポピュラーな疾患であるが、女性では1割の罹患しかなく、本人の気付かない不顕性感染が多いものと推定される。咽頭感染で発見されるケースも多くなった。抗生物質の効果のない薬剤耐性株の問題が今クローズアップされてきた。

③ 性器ヘルペス

性器に浅い潰瘍性病変を形成し、痛みを伴う。

神経を伝わって神経節に潜伏感染するが、月経やストレス、過労など何らかの刺激で再活性化されて再発をくりかえす。女性ではクラミジアについて多い。

④ 梅毒

コロンブスの新大陸発見に端を発し、ヨーロッパから日本にも20年後の1512年に到達している。特效薬がなく、ゲートもこの病気で悩まされた。450年後ペニシリンの発見により梅毒は激減したが、エイズ時代の到来とともに再度患者が増加している。

⑤ HPV【ヒト乳頭腫ウイルス】

尖圭コンジローマは、低リスク型のHPV6, 11型が関与する。高リスク型のHPV16, 18型は子宮頸がんの発生に関与し、その70%はこのウイルスによるといわれる。

このウイルスに対するワクチンが開発されて、二価ワクチン（HPV16, 18）は子宮頸癌予防ワクチンとして、四価ワクチン（HPV6, 11, 16, 18）は子宮頸癌、尖圭コンジローマの予防ワクチンとして世界で接種されている。わが国でも昨年度から中学3年生を対象に接種がはじまった。

§ 予防対策

性感染症は個人個人の注意深い行動により、予防可能であると同時に早期発見、早期治療により将来起こりうる合併症を防ぐことが可能である。中学生や高校生の段階で、性、性感染症についての正しい知識を教え、感染予防の教育を実施することが重要である。性交をしない以外は、性感染症の予防方法はコンドームに頼るしかない。勿論正しく使用することも教える。高校以後大学生や専門学校等の若い方々について、私見を書かせてもらえれば、将来の人口問題や、家族計画、人生設計を兼ねた、そしていま不治の病AIDS/HIV感染症【日本19,533人栃木県で360人の報告数であり隠れ患者数は5倍と推定される】を含めた性感染症について情報を開示し教育していく必要があると思う。最後に、10代後半の若者に無症候の性感染症が多い現状を考慮し若者に検査を受けやすい体制を整えていくことが今後の課題である。

—2011.11.14 講演の要旨から 抜粋—

学校医 医学博士 上地 弘二
【日本性感染症学会 認定医】